

論文審査の結果の要旨

氏名：秋元 優季

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：ジョルジュ・ド・ラ・トゥールによる「マグダラのマリア」について—オイルランプの象徴的意味

審査委員：（主 査） 日本大学教授 木村 三郎
（副 査） 日本大学教授 植月 恵一郎 日本大学講師 森 洋子
日本大学講師 鷺見 洋一

序章

前半部のラ・トゥールの忘却と再評価をめぐる先行研究の紹介は、簡潔ながら要を得た過不足のないものに纏められている。この画家の忘却と再発見の歴史についての考証は手堅く確実である。コレージュ・ド・フランス名誉教授テュイリエ、ルーヴル美術館名誉館長ローザンバールといった最先端の研究だけでなく、カルメ、メリメ、カコー、ジョリーによる一次資料を丹念に調べ、咀嚼している。しばしば、フォッスの論文(1915)だけが強調されるラ・トゥールの先行研究に対して、最も時間と手間のかかる作業を行い、手抜きがない。フランスにおける美術史学の最も重要な方法である、シャルト学派、ソルボンヌ学派の方法を身につけたといえる。とくに評価すべき点は後半部で、画家のパリ滞在に焦点を絞り、カラヴァッジズムとの関係、とりわけ作品の値段をめぐる考察は、ラ・トゥール研究への少なからぬ問題提起になっている。

第1章

現存するラ・トゥールの作品 40 点の中で特別な位置を占める「マグダラのマリア」図像に関して、制作年代を推定し、ついで意味内容を論じるが、先行研究を批判的に紹介しつつ論を進める手法が鮮やかである。

第2章

この章が、なぜ論文の構成上必要であるかが示されている。時代の思想史的背景として、17 世紀のキリスト教美術をカトリック自己改革運動との関連で論じている。思想史把握はきわめて常識的な確認に留まるものの、とりわけ次章以降の展開に不可欠な、カトリックにとって必須の戦略的思想である「悔悛の秘蹟」という問題を抽出している。フランス美術研究者にとっては最も手強い、ドイツにおける神学研究への目配りもある。

一方で、他の聖人や罪人の悔悛ではなく、マグダラのマリアがカトリック改革以前以降と比較すると、どのようにその図像や様式表現に変化が見られるのかという点に絞った方が、より博士論文らしくなったであろう。それによってラ・トゥールのオリジナリティや、時代との関わりが浮き彫りになるのではないだろうか。

第3章

カトリックの自己改革運動の流れで脚光を浴びたマグダラのマリアが、「悔悛の秘蹟」の正当性を証明するための根拠として援用された事情を解明する。記述は段階的な展開をなぞっている。まず「罪の女」という人物像の形成過程（プロヴァンスやヴェズレーへの伝承という地理的波及も含む）、次にバロニウス『教会年代記』を重要視して、そのマリア解釈を書誌的にとりあげ、ついで悔悛するマリアが 17 世紀前半期の、今度は図像表現に占める位置を探究し、最後にカラヴァッジェスキの流れの中で、ラ・トゥール作品を同時代の絵画と比較しつつ、「照明器具」という観点から浮き彫りにしていく。ここの「全体」から「個」へと絞り込んでいく論法は見事である。

第4章

この章には本論文の研究成果が最も明確に示されている。論証の方法は、さらに「絞りこみ」は徹底し、エンブレム論を援用しつつ、ラ・トゥールのマグダラのマリア作品で描かれた照明器具全般を展望した後で、とりわけ「オイルランプ」の重要な役割に着目する。ここで再び、第2章のテーマである「悔悛の意味」などを再登場させ、マグダラのマリアとオイルランプの一体性を論証する。

表1の「ラ・トゥールの作品の中の照明装置と表現の特徴」を23の作品で分析し、その結果、オイルランプが登場するのは「悔悛のマグダラのマリア」だけであることを突き止めた。他の照明器具たとえばランタンと松明は宗教的な主題に限定され、蠟燭は聖俗の主題に登場する。またオイルランプ特有の象徴的意味について、とりわけラ・トゥールの活動地ロレーヌ地方にある、フランシスコ派の分派の修道士アンドレ・ド・ロージュの説教集(1623年パリで発行)に、土器のランプやガラスのランプのもつ神学的な解釈があることに注目し、ラ・トゥールのマグダラのマリアの特徴と結びつけた。その他、ラ・トゥールのマグダラのマリアの先行例となるジャック・ベランジュや、トロフィム・ビゴールの同主題の作品の指摘も注目される。しかし、どのようにしてラ・トゥールはこれらの先行例を知ることができたかについて、何らかの説明がほしかった。と同時に、ラトゥールが先行例に対し、どう自己のオリジナリティを加えたかという比較も必要であろう。

エンブレムとの関係に関しては、1920年代のショネの先行研究を基本とし、アルチャーティはもちろん、ヘシウス、ユニウス、ロレンハーゲンにも目配り良く言及しており、論証の過程に問題はない。しかし、本章に述べてあるオイルランプ、蠟燭、松明など、照明器具の寓意図像に関しては、ヘンケル＝シェーネ著『寓意図像集』Henkel, Schöne, *Emblemata*, 1976, だけを見ても、これらの間の厳密な区別は難しく、室内、室外でも異なり、特に、ガラスのオイルランプの特異性を見つけることができない。また、同書を参照すると、《砂の上で眠る男》、あるいは、《男が背を向けるランプ》の作例は、かならずしも、秋元見解では説明ができないといえる。この点、本博士論文ではまだ十分に17世紀における照明器具の実態とその使い分け、個々の寓意性の有無などの調査が不十分であった。一方で、こうしたエンブレムも視野に入れると、眠ってはいない、光源の方を正視した〈女〉へと描き換えられたものが、ラ・トゥールのマグダラのマリア像とも言える可能性を秘めており、論者のこの分野に関する研究が大いに期待される論点である。この図像の多くの作例を、類型論の視点から考察・分類し、新知見を提示し得たことは、学会誌『美術史』に査読を経て刊行された事実からも、ワールブルグ学派の基本的な方法を身につけたといえるものであり、美術史研究者としての学識を証明している。

結論

序章から第4章までの内容を簡略に述べることは必要である。しかしそれだけでなく、どのドキュメントを発見したのか、どのような資料解釈やテーマ分析を行ったのか、本論文であらためて指摘した先行作品群は既存の研究の限界や矛盾をどう是正し、新たな解明に結びつくことができたかを、端的かつ具体的に論じてほしかった。

総評

全体に美術史学と思想史学の両面にわたる精査や考察がバランスよく共存した好論文である。粘り強い資料の博搜や適切な時代背景への目配りも強みであり、また終章の照明器具という主題へと収斂していく構成も、きわめて説得力に富む。今後、海外の美術史学会への欧文論文の投稿と活躍を大いに期待したい。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 27年 1月 20日